

追手門学院大学 2025 年度

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」

リテラシーレベル 自己点検・評価報告書

令和 8 年 4 月 9 日

追手門学院大学

内部質保証推進委員会

1. 自己点検・評価の実施

本学の数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて、内部質保証推進委員会（以下、「推進委員会」という。）は、令和7年度実施のプログラム実施状況について自己点検評価を実施した。併せて本プログラムの達成・進捗状況の自己点検評価を実施した。

2. 自己点検・評価の項目

本プログラム全体の点検・評価においては、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の審査項目を基準に評価を行った。プログラムを構成する個々の授業科目の評価については、シラバスや成績評価の妥当性、全学授業アンケートの結果を参考に評価を実施した。

3. 評価結果の判定

評価結果に基づき、以下三段階の評価レベルで判定を行った。

- 3：優れたレベルの取組みである。
- 2：標準的なレベルの取組みである。
- 1：改善の必要がある。

4. 自己点検・評価結果

自己点検・評価の観点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	評価
学内からの視点		
〔観点1〕プログラムの履修・修得状況	本プログラムの令和7年度履修者数実績は432名（履修率4.62%）であり、そのうち修了者数284名（修了率65.74%）を輩出した。ただし、昨年度と比べて履修率が0.84ポイント減となっている。一方、履修者の所属学部を分析した結果、昨年度以前と同様に学部間による乖離が大きく、カリキュラム上、データを扱う科目のある学部は一定の履修者がいるが、今年度も学科科目に数理・データサイエンス・AI関連科目を有する学部の履修者は低い結果となった。引き続き、履修率の高い「数的処理入門」にて当該プログラムに関する紹介・PRを実施するなど、各年度の目標とする履修者数の確保に繋げていく。	1
〔観点2〕学修成果	「全学授業アンケート」の結果を基に、本プログラムのシラバスに記載の到達目標に対する達成度について確認を行った結果、総じて87.60%の学生が到達目標に達したと回答し、昨年度から3.04ポイントのプラスとなった。学習成果面については大きな課題は認識していない。	3
〔観点3〕学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生の授業内容に対する理解度に影響を与えると考えられる使用教材や資料構成、ならびにICTを活用した授業の工夫等について「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、使用教材や提示資料の分かり易さにおける学生評価においては、88.38%の学生が分かり易いと回答し、昨年度より3.91ポイント向上した。内容の理解度についても大きな課題は認識していない。	3
〔観点4〕学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	後輩等の学生への推奨度を測る指標として、該当科目の授業計画や課題提出のスケジュール、理解度に繋がる予習・復習の具体的な指示など、分かり易い授業の進め方に関する「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、89.99%の学生から総じて満足度が高いとの評価を得ることができた。科目ごとの評価においては若干のばらつきがみられるが、授業の進め方において後輩等の学生への推奨度は高いと言える。	3
〔観点5〕全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	該当科目の分かり易い授業の進め方に関する「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、89.99%の学生から総じて満足度が高いとの評価を得ることができた。また、授業内でチャットやメッセージ等の機能を利用し気軽に教員へ質問できる授業環境の整備有無においては74.37%の満足度となっているため、授業内においても理解度を高める教育環境の工夫が成されていると評価できる。また、「情報の科学」および今年度クラス数増加を図った「コンピュータ入門1・2」において、それぞれ約670名・約1000名の履修者増となり、当該2科目においては履修率向上につながった。今年度よりマイクロクレデンシャルによる認定制度も開始したことから、次年度以降の一層の履修率向上・終了率向上に期待する。	3

学外からの視点		
〔観点6〕教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和4年度からの開講となるため、プログラム修了者の初めての卒業生を輩出することになる。よって、進路状況及び企業等の評価は確認できない状況にある。一方で、本学の就職キャリア支援課による進路状況調査や就職先企業へのヒアリング調査、ならびに大学政策課が実施する卒業生アンケートにより、将来的に本プログラムを修了した学生の動向について調査・分析することが可能となる。これら調査データをもとに、本学IR推進オフィスと連携して多角的に本プログラムの有効性について検証することを予定している。	1
〔観点7〕産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和4年度からの開講であるが、令和6年度までの実績でようやく、一定のプログラム履修者数に達した。よって、産業界からの視点を含めた教育プログラムの内容・手法への意見の調査については令和7年度から検討を開始した。具体的には、サンプル調査として、本学WIL推進センターが主催する実習プログラム先の企業に対し意見を収集したが、実務として発揮する場がなく評価ができないとのコメントがあり、卒業生アンケートなどの方策を検討することとした。	1
〔観点8〕数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	全学授業アンケートの「到達目標に対する達成度」および「将来役立つ知識・スキルの修得」の結果から確認を実施した。まず、「到達目標に対する達成度」は87.60%が達成できたと回答しており、さらに「将来役立つ知識・スキルの修得」については89.91%の学生が身についたと回答した。学ぶことの楽しさや意義を感じ満足度の高い授業となっていることがうかがえる。引き続き、これらのアンケート結果をもとにFDを通して授業運営・手法を改善していく。	3
〔観点9〕内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	全学授業アンケートの「予習・復習に関する適切な指示」「ICTの活用有無」「資料構成・提示資料の分かり易さ」、学生の理解度に関するアンケート結果から確認を実施した。いずれの結果においても総合評価では87.97%の満足度を得た。中でも、「板書や資料提示（パワーポイント）等の文字・図表の読み取りやすさ」に関しては、10ポイント以上向上した昨年度からさらに上昇し、88.38%という結果となった。今年度の目標とした「フルオンライン（オンデマンド）授業のなかでも分かり易い資料構成と提示方法についての工夫」が各教員によって行われた結果といえる。	3

以上

追手門学院大学 2025 年度

「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」

応用基礎レベル 自己点検・評価報告書

令和 8 年 4 月 9 日

追手門学院大学

内部質保証推進委員会

1. 自己点検・評価の実施

本学の数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて、内部質保証推進委員会（以下、「推進委員会」という。）は、令和7年度実施のプログラム実施状況について自己点検評価を実施した。併せて本プログラムの達成・進捗状況の自己点検評価を実施した。

2. 自己点検・評価の項目

本プログラム全体の点検・評価においては、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」の審査項目を基準に評価を行った。プログラムを構成する個々の授業科目の評価については、シラバスや成績評価の妥当性、全学授業アンケートの結果を参考に評価を実施した。

3. 評価結果の判定

評価結果に基づき、以下三段階の評価レベルで判定を行った。

- 3：優れたレベルの取組みである。
- 2：標準的なレベルの取組みである。
- 1：改善の必要がある。

4. 自己点検・評価結果

自己点検・評価の観点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	評価
学内からの視点		
〔観点1〕プログラムの履修・修得状況	本プログラムを構成する科目ごとの令和7年度履修者実績数は、「L&Sゼミ」75名、「未来課題」53名おり、履修率は1.37%となった。また、当該2科目を共に履修した実績数は3名、そのうち修得者数は3名（修得率100.00%）であった。昨年度と比べて修得率は向上したものの履修者数が減少してしまったため、次年度は履修者およびプログラム修了者の増加を最大の目標とする。	1
〔観点2〕学修成果	対象となる科目の「全学授業アンケート」において、本プログラムのシラバスに記載の到達目標に対する理解度について調査した結果、「理解している」との回答は、100.00%となった。また、プログラム履修者3名全員が単位を修得していることから、高い学修成果を得られたものと考え。授業においては、授業回ごとに学修成果を確認しながら、少人数のゼミ形式できめ細やかな対応を実施することができたため、結果として履修者3名全員が修得者となることに繋がったと考える。	3
〔観点3〕学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生の授業内容に対する理解度に影響を与えられとされる使用教材や資料構成等について「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、板書や資料提示（パワーポイント）等の文字や図表の見易さについては、95.24%が理解し易いと回答した。	3
〔観点4〕学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	後輩等他の学生への推奨度を測る指標として、目標の達成度と授業満足度について、「全学授業アンケート」の結果をもとに確認を行った。結果として、回答者の目標達成は100%に達した。また、同様に全体的な授業に関する満足度においても授業全体を通して満足したという回答が100%に達した。	3
〔観点5〕全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	今年度は、昨年度と同クラス数の開講となり、各科目の履修者数は前年度比103.22%の微増となった。プログラム履修者数の向上には改善の余地があるため、次年度も引き続き、リテラシープログラムの科目の内、全1年生が履修する科目にて案内を実施する。また今年度より、両方のプログラム要件科目の履修を促す施策として、数理・データサイエンス・AI教育プログラム応用基礎レベルをマイクロクレデンシャルとして認定し、オープンバッジの取得を推奨している。この取組を積極的に学生に周知し、プログラム修得率の向上に努めていく。	1

学外からの視点		
〔観点6〕教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和5年度開講となるため、修得者のなかで現時点卒業生を輩出していない。よって、進路状況及び企業等の評価は確認できない状況にある。一方で、本学の就職・キャリア支援課による進路状況調査や就職先企業へのヒアリング調査、ならびに大学政策課が実施する卒業生アンケートにより、将来的に本プログラムを修了した学生の動向について調査・分析することが可能となる。これら調査データをもとに、本学IR推進オフィスと連携して多角的に本プログラムの有効性について検証することを予定している。	1
〔観点7〕産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和5年度開講となるため、十分な評価を得るための修得者数に至っていない。よって、産業界からの視点を含めた教育プログラムの内容・手法への意見の調査については令和7年度から検討を開始した。具体的には、サンプル調査として、本学WIL推進センターが主催する実習プログラム先の企業に対し意見を収集したが、実務として発揮する場がなく評価ができないとのコメントがあり、卒業生アンケートなどの方策を検討することとした。	1
〔観点8〕数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	「全学授業アンケート」で85.71%の学生が「個人ワーク、グループワーク、ディベート、ディスカッション、ワークショップなどの手法を活用していた」と回答していること、および「将来役立つ知識・スキルの修得」については100%の学生が身についたと回答したことから、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる機会を十分に提供できていたといえる。	3
〔観点9〕内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	「全学授業アンケート」の板書・資料提示（パワーポイント）等の文字や図表の見易の分かり易さ、目標の達成度と授業満足度に関するアンケート結果から確認を実施した。いずれの結果においても総合評価では97.62%の満足度を得ているので、「分かりやすい」授業を実施できていたと考える。 また、本学では次年度よりアプリを利用したAIアカデミックアドバイザー「OIDAI+」の利用開始や、授業におけるAI活用に関するガイドラインを示すことが決定しており、学生がAIを利用し、慣れ親しむ環境を整えている。	3

以上